

特別講演

私の脱工業社会論序説

林 雄二郎（財団法人未来工学研究所副理事長，当学会会長）

○線的な史観と循環的な史観

W. W. ロストウの経済発展段階説——伝統社会、離陸への先行条件、離陸、成熟期、高度大衆消費時代の5つの段階

D. ガボール——IQ（知能指数）とEQ（倫理指数）とがともに最高水準に達した社会を成熟社会とする。

D. ベル——前工業化社会、工業化社会、脱工業化社会

等は何れも線的な史観であるが、これと対照的なのが東洋の賢人達の循環的な史観、荘子の言葉「生は萌す所あり、死は帰する所あり、終始は無端に相反りて、その窮まる所を知る莫し」、後漢書の張純伝の中に「冬者五穀成熟」とある。成熟は終わりにして始まりである。木村尚三郎によれば（「和魂和才のすすめ」昭和54年）「西ヨーロッパの歴史は、11世紀半ばから13世紀半ばまでが産業の時代。それから18世紀半ばまでが商業の時代、それ以後20世紀半ばまでが産業の時代、そして現代は産業の時代から商業の時代に転換してきている」という。これは明らかに循環的な史観といえる。

西洋的な体操と太極拳の違いに見るものは？、仏教の般若心経に見る思想をどう読むか、現在から過去に遡る逆方向の歴史を考えてみたらどうか。

○成長と成熟と循環

成長と成熟とを判断するものさしとして、エネルギーとエントロピー。但し、ここでは、エネルギーとは、社会全体の活力、膨張力を巨視的に見ることとし、エントロピーとは、社会全体の変化の方向から、それが或る種の“秩序”を指向しているか、その反対かによって推論することとする。

日本の場合、13世紀頃から徳川幕府が成立するまでの17世紀初頭頃までは、前工業化社会（農業社会）における成長期・徳川幕府時代、つまり、17世紀はじめから19世紀半ば頃までが成熟期ということになる。そして、工業化社会における成長期は明治以降、すなわち19世紀半ばから20世紀後期のいわゆる戦後、高度成長期までがそれに相当し、現代は工業化社会における成長期から成熟期に移行しつつある段階ということになる。

○文明と文化

成長期、成熟期の社会を見るもうひとつの鏡として文明と文化という面から見て見ると特に成熟期の社会の象徴として文化がある。

まず、言葉の定義であるが、文明とは人間に便益を与えてくれるもの（「文明の利器」という言葉がある）、文化とは人間にアイデンティティを与えてくれるものである。

今日、日本文化としてあげられるものはすべて典型的な農業文化といえるのではないか。

○農業と工業の違いは何か

農業——地域性と季節性

ミニ・プロダクションとミニ・マーケット

工業——品質の均質性と常時性

マス・プロダクションとマス・マーケット

この違いを別な言い方をすれば、農業は循環型産業、工業は線型産業と言えるのではないか。

○成熟期の社会は、“仕上げ”の意味がある

前工業化社会を仕上げだという意味で、日本は世界の中で最も美事に成功した例であったといえるのではないか。

もし、そうとすると、現代の日本は極めて重大な段階にあるといわねばならない。果たして日本は前工業化社会を仕上げたようにうまく工業化社会を仕上げられるか。

そのためには工業化社会における文化、すなわち、工業文化を見事に産み出さねばならない。その典型としてIT文化（IT文明ではない！！）の行方を注目したい。

○脱工業化社会は、いついかなる社会か

脱工業社会の主役は誰か、それはNPOではないか（IT産業ではない）

但し、そのためには現代のNPOがそのままでは駄目である。現代のNPOならびにNPO活動には脱工業化社会の主役となるための自覚も資格もまだ無いと言っていい。

いうまでもなく、工業化社会の主役は企業（NPOとの対比で言うならPOというべきか）であった。工業化社会にあけるPOの目的はいうまでもなく、その活動によって利潤を上げることである。これに対して、NPOの活動目的は何か。それは、Altreism（利他主義）であると

いう。工業化社会における企業の活動も、社会の中で求められるものを提供するという点では一見NPO活動と共通しているように見えるが、根本的に異なるところは企業の場合は“利他”は手段であって目的ではないということである。NPOの場合はそれが目的であるのだから、そのためには今日の企業活動における生産性に相当する何らかのものさしを持たねばならないし、また、そのための一切の仕組みが整備されていなければならない。

○工業化社会から脱工業化社会への“進化”

前工業化社会から工業化社会への“進化”の時と違って、工業化社会から脱工業化社会への“進化”は、すでに活動のフロンティアが地球全体に広がってしまっているのも更に厄介な問題がある。NPOとともにNGOの存在も重要である。環境問題等も、たとえば京都会議の結果も今のままでいいのだろうか。

その他さまざまな問題がある。舵取りをひとつ誤ると文字通り地球的規模の破壊的な結果を招きかねないことがたくさんあることを心配せずにはいられない。